Partir

VOL.2
2006.10

宮城学院女子大学
MG発――コミュニケーション情報誌 "パルティール"

「Partir（パルティール）」はフランス語で "出発する"――――
――新しい時代に飛びたとうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

巻頭対談
120年の伝統の上に築くもの
浅野史郎 前宮城県知事 × 吉崎泰博 宮城学院女子大学学長

シリーズ **思索の森の案内人たち**

O.G. INTERVIEW 社会で活躍する卒業生たち
在学生の活躍を紹介! Students' Voice
MGの挑戦
MG Information

Partir VOL.2 2006.10
宮城学院女子大学
MG発――コミュニケーション情報誌 "パルティール"
発行／宮城学院女子大学　編集／宮城学院女子大学広報委員会　TEL:022(279)4698

PHOTO ESSAY

MG――フォトエッセイ ❷

時をこえて

先ごろ宮城学院創立120周年記念『パートフル童話集2006』が刊行された（出版／けやきの街）。ありがたいことに新聞各紙に取り上げられ、TBCラジオから作品のひとつが全国ネットで朗読されるなど、たいへん好評をいただいている。

表紙を飾っているのは東二番丁時代の第一校舎。レンガ造りの風格ある建物ながら、どこかなつかしくあたたかみのある絵である（絵／伊勢文夫・宮城学院事務局長）。あるいはこの表紙に惹かれて『童話集』を手にされた方々も多いのではないだろうか。

宮城学院が東二番丁（現在仙台国際ホテルが建っている場所）を離れ、桜ケ丘に移転したのは1980年。それからすでに四半世紀が経過している。時の流れとともにあたりの風景もキャンパスを行き交う学生たちの姿も様変わりした。当時の面影を残すものは前号で紹介された噴水くらいなもの…ずっとそう思い込んでいた。だがある時、つかのまの静けさを求めて礼拝堂に足を踏み入れた私は、思いがけない場所に見覚えのあるレンガ造りの建物が描かれていることに気がついた。

礼拝堂に入ると大きなステンドグラスが東側の壁面を飾っている。むかって左から「マリアに抱かれた幼子イエス」（第1面）、「十字架にかけられたイエス」（第2面）、そして「昇天するイエス」（第3面）…。ところがよく見ると、その第1面に東二番丁時代の大講堂（兼礼拝堂）と噴水が、また第2面には開かれた聖書と鳩、すなわち宮城学院の校章がさりげなく組み込まれているではないか。そうだったのか…私はひとり頷いた。旧大講堂／礼拝堂に象徴される宮城学院の歴史と記憶は現在の礼拝堂に受け継がれ、今も静かに私たちを見守っていたのである。

今礼拝堂の拡張工事が行われている。増築部分はボランティア活動の拠点となる予定である。キャンパス中央に位置する礼拝堂は、これからも宮城学院に集う人々の心の拠り所として豊かな時を育み続けていくことだろう。

日本文学科　深澤　昌夫

編集後記

今、ここにある「宮城学院らしさ」

本誌を編集している大学広報委員会は昨年度から始まった新しい組織です。「宮城学院らしさ」をどう伝えるか。広報には多様な形がありますが、いつも考えるのはこのことです。たとえばポスターならば、基本情報を伝えると同時に、キャッチコピー、イメージ写真、文字の書体、配色などの具体的なデザインで「宮城学院らしさ」を表現したい。では「宮城学院らしさ」のエッセンスとは何か？ 歴史と伝統、女性のための学びの場、生きいきとした個の確立、背景にあるキリスト教精神…。あくまで個人の主観ですが、このようなキーワードが浮かびます。

本誌の記事からも、自ずと滲み出る「宮城学院らしさ」を感じとっていただければ幸いです。（N.O.）

巻頭対談 浅野史郎 前宮城県知事 × 吉崎泰博 宮城学院女子大学学長

120年の伝統の上に築くもの

120周年を迎えた宮城学院女子大学が、その伝統の上に立ち、さらなる発展を続けるためには――。
今回の対談のゲストは、昨年、3期12年を務めた宮城県知事を勇退後、ライフワークの障害福祉の分野に加え、大学人としても活躍中の浅野史郎氏をお迎えしました。

吉崎学長　浅野さんの著書「疾走12年アサノ知事の改革白書」（岩波書店）を読ませて頂きました。日本人は、よく「お上」に従うといいますが、浅野さんは、県民一人ひとりの視点から発想し、「中央政府の言いなりにはならんぞ」という姿勢を持っている。自主独立の精神、キリスト教精神を感じ取りました。

日本古来の伝統は非常に素晴らしいものですが、それに加えて西洋近代の基盤であるキリスト教精神に触れることによって、複眼的な視野が開け、人間の幅が大きく広がります。浅野さんは聖ドミニコ幼稚園に通われたそうですが、その経験が影響しているのでは？

浅野氏　聖ドミニコ幼稚園で、キリスト教の雰囲気と、アルファベットを学んだことが非常に印象深く、私の幼少の記憶はそこから始まっているんですね。いや、でも自分では気付きませんでした（笑）。もしそうなら、吉崎さんの慧眼かと思いますが…。

宮城学院は今ではたくさんある女子大のひとつかもしれませんが、キリスト教精神に基づいて女学校をつくろうとしたことの意義を歴史の中に置くとはっきりしますね。120年前の日本と女性が置かれていた立場、そして創設者の志を、もう一度考えてみると、やはりその存在の意味は大きいと感じますね。

貢献を超えて地域をリードする存在

吉崎学長　明治憲法下で女性の権利、人格が認められていなかった創設当時、キリスト教精神に基づいた教育を掲げた宮城女学校は、宮城の女子教育をリードしていました。大学の「地域貢献」が最近話題になっていますが、大学側からみれば、地域に貢献すると言うよりは、大学が地域をリードしている、という意識なんです。現実に宮城学院はリードしているという自負もあります。単なる地域貢献を超えた大学の存在があることを少なくとも内部は感じています。知事時代の浅野さんは、「貢献」ではなく、まさに「リード」してくださったと思います。

浅野氏　私のことはさておき（笑）。今、この大学があることを当たり前に感じている学生たちに、繰り返し120年前の創設の強い意志を伝えていくべきですね。知事をやっていて、常に自分に言い聞かせていたのは、「なぜ私はここ（知事の椅子）にいるのか」ということです。私の場合は、前知事がゼネコン汚職で逮捕されて、そのイメージの払拭を担わされたという経緯がある。そのときの県民の思いがあって、私を選挙という形でそこに就かせてくれた。常に「初心忘るべからず」ということを必要に思います。

吉崎学長　女性の立場が弱かった当時と比べて、現在は、社会全体のもっと深刻な状況があります。それはあまりにも自己中心になりすぎているということ。最近「自分らしい生き方」が奨励されています。それぞれが自己実現を求めて夢を追う。一見良いことのようですが、自己の欲求充足だけが人生の最終目標になってしまうのは大きな問題です。例えば、挫折した人はだめな人間とされたり、最近の事件では、絶望して他の人を巻き添えにして死ぬとか、腹立ちまぎれに人を殺すなど、利己的・排他的・反社会的行動に走りがちになります。逆に上手（うま）くいっても傲慢になる。

世界人口の65億人のそれぞれが自分本位の自己実現を求めることにより、地球環境の破壊が急速に進行しています。社会の中だけでなく、生態系の中で共に生きる喜びに目覚めさせることが、教育の課題だと思います。共生の中で自分らしく輝いて生きることが幸せであり、それを教えてくれるのがキリスト教の隣人愛なんです。

浅野氏　今、「自分らしさ」と言われているのは、単に趣味の問題ですね。コーヒーが好き、紅茶が好き、サッカーより野球が好きとか。その程度の自分らしさを大事にしたいと言っているように感じます。

本来言われるべきなのは「個の確立」です。誰が何と言おうと、社会がどういう風潮に流れようと、自分が守るべきものはこれだと。それはコーヒーが好き、紅茶が好きの次元ではない。大学での教育も含めて、そういった「個の確立」を言われるべきですよね。

また「一人前の大人の要件」というのは、まず自立。自分で自分を、または家族を養っていくための経済的な自立です。そして「務め」がある。自分のために働くのとは別の、自分より生きる力が弱い人のために何かをすること。それが一人前の大人だと思います。そのための「技術」と「心構え」を教えることが、大学という高等教育機関ではないかと思います。

> 「技術」と「心構え」を教えることが大学という高等機関ではないかと思います。　浅野氏

教育の理想を実践できる環境とは

浅野氏　ところで吉崎さんは、ここに来る前は北九州市立大学にいらっしゃって、場所も九州から東北、学校も公立から私立、男女共学の大学から女子大と、すごく違いがありますよね。そこと対比のうえで、宮城学院を語ってくださいませんか。

吉崎学長　公立大学の建学の精神は、一般的な人間の理想です。すると、大学の価値観が立つ特定の場所がない。漠然としているので、教員たちの自我が強く出てくる。民主的にやろうとすると、中には身勝手な人もいて、そういう教員に困ることも多かったんです。

宮城学院は私立なので、明確な建学の精神を核にして、すべてが運営される。教授会も良心的に協力するので、民主的な方法がうまく機能する。ここではいい教育ができると実感できるんです。

浅野氏　それは、「大学の自治」という言葉になると思いますが、外の何らかの権力が「こういう学問をやれ」などと言ってきても跳ね返す、それが大学の自治ですよね。だけどそれを「大学の中での自由」とはき違えている場合がないかということですね。教員が勝手なことをしていて、大学が社会の中の存在意義を果たせなければ、世の中に見捨てられることになる。前任校で吉崎さんの感じた危機感は、大学の自治を守るためのものではないかと思いました。そういった意味で宮城学院は理想的なんですか？

シリーズ

思索の森の案内人たち

「学問する」ということは、新しい知識の世界を拓く喜びに満ちています。学ぶことは、きっとこれからの人生に輝きを与えてくれるはず!。そんな世界を案内してくれる先生方に、「学びの姿勢」についてお話を伺いました。

国際関係論

国際文化学科（アフリカ地域研究）
富永 智津子 教授

経験から学び、学びながら行動する

研究の出発点

私が、アフリカ研究を始めたのは、1979年。27年前になります。きっかけは、夫の急逝。それまでの私は、「自己実現」とか「キャリア」とかいう世界とは無縁でした。勉強も好きな方ではなかった!そんな私を変えたのが、13年間の「専業主婦」と「子育て」経験。これは、私にとってのかけがえのない「フィールドワーク」だったのですね。もう「女性」は卒業!今度は「男性」の経験!!そして飛び出した先がアフリカのフィールドでした。これが転機の第1幕。

転機の第2幕は、90年代にやってきました。それは、仙台で同時に起きた3件のキャンパスセクハラ裁判との関わり。これが、私に再び「女性」の視点を取り戻すきっかけを与えてくれたのです。それは、私の「学問」にも欠けていた視点でした。「目からうろこ」の経験でしたね。しかも、ここは「女子大学」!「女性」がつくり上げてきた文化は、「平和」で「非暴力」。これは、ほぼ世界中の国や地域に共通のもの。もちろん、アフリカでも…。これは、失ってはいけない……。行動しながら学び、学びながら行動する、という姿勢は、こうして私のスタイルになっていったのだと思います。

生きた「教材」から学ぶ

私の「学問」に血と肉を与えてくれているのは、さまざまな「経験」…。教室も、そうした「経験」の場にしたい…ということで、フィールドワーカーとしてのネットワークを利用し、さまざまなゲストを招いています。例えば、グァテマラの内戦や占領下の東ティモールで性暴力の被害に遭った女性、女子割礼の廃止に取り組むナイジェリアやソマリアの女性、ケニアのスラムで子供たちの生活や教育を支援している日本人女性やミュージシャン…。「国際関係」を膚（はだ）で感じる瞬間でもあります。

一方で、「行動」することの楽しさや意義も味わって欲しいと、新聞への投稿を授業の一環に加えています。学生の調査が記事になったこともあります。私も一緒にそうした「行動」のプロセスから学ぶことが多いのです。

知識は、インターネットや文献からいくらでも入手できるようになりました。そんな今、必要なのは、そうした知識の受け皿としての「考える力」を鍛えること!それが、「行動する力」になり、「生きる力」を生み出す…、そんな気がしています。

生命科学

食品栄養学科（細胞生物学）
矢内 信昭 教授

栄養士（プロ）として求められること

基礎あってこそ深まる知識

私の担当している科目は、生化学・免疫学・臨床分子生物学など、管理栄養士として必要な知識を含む生命科学です。現場で使う栄養学、食品学と直接関係のないように思うかもしれませんが、実はそのベースになっている大切な「基本知識」。例えば「食物アレルギー」というけれど、その考え方は、どれくらいの人の手や歴史を経てできたのか。カロリーという単位はどうやってつくられたのか。アミノ酸はどうして身体にいいのか?近ごろ話題になっている「メタボリックシンドローム」は本体は脂肪細胞で、脂肪細胞の機能が分かっていれば説明できます。栄養士なら、この言葉を使うとき言葉の出所を分かっているべきなんですね。

世の中の歴史を知らない人が、世の中を動かそうとすると大変なことになるでしょう。新しい知識はちゃんとしたベースがないと、積み重なっていかない。そしてそういうことを学ぶ機会は大学にしかないんです。

また生命科学には、動物（生き物）の母親として必要な知識があります。例を挙げると、母親の初乳の中には、免疫記憶を子に伝える抗体（タンパク質）があります。つまり初乳を飲ませないと、免疫力が子どもに伝わらないんですね。これは免疫学の教科書のメインに載っているものではないのですが、女性に必要な知識のひとつとして授業に取り入れています。

サイエンスが教えてくれること

私の専門分野（分子生物学、細胞生物学、幹細胞生物学）における研究内容は、骨髄の細胞の細胞間相互作用の解析です。骨髄には未分化の細胞がたくさん詰まっています。例えば、人間がなぜ80年も生きるかという、血液の細胞が更新されるからなんですね。その供給が止まると人は2週間で死んでしまいます。骨髄は血液の細胞を必要な分だけ作る機能があるのですが、もとになる細胞が枯れずに供給されるのはなぜか。その分子機構を解くのが仕事。

サイエンスとは前に行くこと。新しい一歩を行くことです。ゼミでは脂肪細胞の分化がどのような仕組みで調節されているのかを解いていきます。疑問を見つけて実験をし、小さいですが一歩を踏み出す体験をしてもらっています。

生化学実験は、結果がすべて。結果を受け入れ、何が起こったのか考えるのがサイエンスです。原因があって結果があるという実験化学のものの見方は人生にも応用できるでしょうね。

これを読んでもっと詳しく――「おすすめの本」

● 富永先生おすすめの本 ●

「ザンジバルの笛」
～東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化～
富永 智津子著　未来社　2,200円

易しいスワヒリ世界へのいざないの書です。歩きながら考え、調べたことを、感動を交えて綴ってみました。旅先の1つに入れてみてください。

● 矢内先生おすすめの本 ●

「絵とき 再生医学入門」
朝日奈 欣治　立野 知世　吉里 勝利　著
羊土社　3,300円

これからの医療を変えるかもしれない再生医学の基礎知識です。
ヒトの体を構成する細胞のおもしろさが書かれています。

社会で活躍する卒業生たち

O.G. INTERVIEW

主人公の心理を読む毎日が幅広い人間理解につながった

第一生命保険相互会社
仙台総合支社仙台コンサルティング営業室
仙台第二オフィス 支部長
常泉 乃里子さん

―支部長という立場での現在のお仕事は?

「仙台第二オフィス」は、新卒入社の女性社員のチーム。私はチームをまとめながら、営業職の育成指導にあたっています。初めて社会に出て、生命保険営業という世界の入口に立った彼女たちには、仕事だけでなく、働くことの意味や将来など、いわば「人生全般」についてのアドバイスが必要と感じています。自分も同じように上司や先輩に助けられてきましたからね。

学生時代は教職を目指していたこともあって、まず一般職からトレーナーへのキャリアアップが目標でした。育成や指導する立場になってから仕事が一段とおもしろくなりましたね。

―大学時代の経験が仕事に役に立っていることは?

登場人物の心理や作者の意図を考える作業の中で、気持ちの伝え方や話の組み立て方を学んだように思います。生命保険は形の見えない商品。相手が求めていることを捉え、きちんと説明できないと興味も持ってもらえません。クラスメートとの討論で、「主人公の生き方」など人生を語ってきたことも、何かつながっている気がします。

―新入社員を育てる立場から、宮学生にアドバイスを。

大学時代は「チャレンジと経験」をたくさんして欲しいと思います。例えば、アルバイトは、「お金を稼ぐ」とはどういうことか身をもって知ることができます。若い時はつきあいが限られて、世界が狭くなりがち。幅広い世代の人と話す機会を持つことも大切です。もちろん、勉強も大切ですね(笑)。

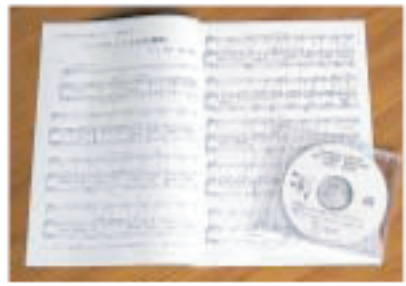
あとは、自分の3年後、5年後のビジョンを持つこと。「あんな女性になりたい」「こういう生き方がしたい」というのでもいい。私は、子どもを産んで、子育てと仕事を両立させたいですね。子どもを持つことでちょっと別な世界も見えてくる。今よりもっと人生を楽しめると思うんです。

常泉 乃里子さん 1995年 日本文学科卒

1995年、第一生命保険相互会社入社。個人営業、新人育成のトレーナーなどを経て、2004年より現職。
4年前に結婚、現在夫と2人暮らし。趣味は、ストレス発散も兼ねた「カラオケ」。

Students' Voice ～在学生の活躍を紹介！～

未来へ羽ばたく歌声を
～120周年記念MGソングを演奏して～



今年は宮城学院創立120周年です。その記念行事の一つとして宮城学院の愛唱歌、MGソングが公募されました。私は選考会の時から数多くの公募作品を歌わせていただきましたが、どれも宮城学院の素晴らしさが伝わってくるものばかりで、審査員の先生方は選考にかなり苦労をされていたようです。CDになった「いつの日にも（2006MG賛歌）」と「心友」は、愛と希望、そして夢に満ち溢れています。宮城学院で学んだものを糧に未来へと羽ばたく思いで歌いました。どうぞご一緒に、私たちと宮城学院の未来に歌声を響かせましょう。（鎌谷美奈子）

MGソング最優秀賞と優秀賞が選出される選考会の時点から、ピアノ伴奏という形で参加させていただきました。MGソングの演奏を通して、入賞作はもちろん、応募作品それぞれに母校への温かい感情を感じ、改めて在校生や卒業生の母校愛の深さ、そして母校が私たちに与えてくれる愛情の深さを感じました。創立120周年という節目にこのような素晴らしい音楽と関われたことをとても嬉しく思います。（千葉裕子）

左：Ｍ・Ｋさん
音楽科研究生2年
宮城県第三女子高等学校出身

右：Ｓ・Ｃさん
音楽科研究生2年
常盤木学園高等学校出身

宮城学院創立120周年記念として公募されたMGソングのCDで、歌唱と伴奏を担当しました。

海外実習・語学実習から学んだこと

フランス実習では、フランス、ベルギーなど4カ国を訪れました。ベルギーブリュッセルでは約2週間語学学校に通い、自由時間にはブリュージュなどへも出掛けました。フランス語の授業は少人数制で説明は英語でしたが、いずれも単語力のなさを実感。課題が見つかり、意欲が増しました。（佐藤麻美子）

中国実習では、大学での中国語の授業と日系企業見学や中国人との交流を中心に10日間を過ごしました。日中間にはさまざまな壁がありますが、実際に交流し誤解があることも分かりました。また、百三高地や万里の長城なども見学し、格別の雄大さに触れました。（小野寺佑実）

タイ語学実習では3週間、タイの学生と一緒に英語の語学学校へ通いました。共通語は英語のみという環境の中、一度にタイ人2人、日本人2人で寝起きをともにし、自分たちの英語が通じないことや文化の違いに戸惑うことも多々ありました。しかし何より大事なのはコミュニケーションをとろうとする気持ちなのだと気付かされました。（佐藤瑞穂）

海外での実習の醍醐味は、机上では分からないことを身をもって体験できることです。初めて気付く文化の相違や新たな自分の発見など現地で得た多くの刺激を、今後に活かしていきたいと思います。

左：Ｙ・Ｏさん
国際文化学科3年 宮城第一高等学校出身

中：Ｍ・Ｓさん
国際文化学科3年 秋田県立平成高等学校出身

右：Ｍ・Ｓさん
国際文化学科3年
福島県立磐城桜が丘高等学校出身

国際文化学科では昨年度、フランス、中国で海外実習を、タイで語学実習を行いました。

知っ得!? わん☆こいんツアー…

Q…わん☆こいんツアーって？

A…人間文化学会が主催する日帰りツアーで、宮城県内外の博物館・美術館などへ出掛けます。5年前から始まり、12回目の前回は立石寺（山寺）に登った後、山形美術館で「ビートルズ展」を見学しました。

Q…このツアーの魅力は？

A…なんといっても、500円チケット1枚（旅行保険料）で参加できることです！ 博物館などの入館料は学会が負担し、バスをチャーターする本格的なツアーです。現地では学芸員など専門の方がたに説明をお願いしています。

Q…これまで印象に残ったことは？

A…先輩の話では、高速道路でバスのタイヤがパンクしたことがあったそうで、代わりのバスに乗り換える時「高速道路の上を歩いちゃった！」そうです。美術館の中で行われていた結婚式を生で見られるという「想定外」の収穫もありました。

Q…担当していて、何が得られた？

A…企画力、交渉力、指導力、そして体力もつきました。就職にも自信がつきそうです！

風土記かの「くりでん」に乗る。

左：Ｋ・Ａさん
人間文化学科3年 聖和学園高等学校出身

右：Ｍ・Ｔさん
人間文化学科2年 仙台高等学校出身

人間文化学会の委員長（赤間）とツアー担当委員（白鳥）。毎回の思出が経験と自信を生んで、楽しい旅ん倶もしくなりました。

※学生の学年は2006年10月現在のものです。

「NEWS MG」にボランティア・スタッフ誕生！

「NEWS　MG」は学友会が発行する学内紙です。これまで執行部内で制作してきましたが、この度、強力なボランティア・スタッフが誕生し、イメージも一新、見て、読んで楽しく、話題の広がる紙面になりました。第一弾は新入生歓迎会特別号。5名のスタッフ全員が、これだけ多くの人の目に触れる新聞作りは初めて。当日の取材に始まり、レイアウトやキャッチコピーの文案等々、手探りしながらの編集作業を経て完成させました。セリフ入りで自分が載っていた、と驚いた方もあったようですが、あくまで取材に基づいているとのこと。リアルだからこそおもしろいのが新聞です。次号以降では、OGや留学生へのインタビューなど新企画も予定されています。

「もっと多くの学科の学生に参加してもらい、新聞作りを通じた交流を学友会と大学生活の活性化につなげたい」と有志スタッフたちは考えています。企画、写真、インタビュー、記事やコピー、デザインなど、いろいろな作業がありますが、興味のある分野にあなたも参加してみませんか。関心のある方は学友会までお問い合わせください。

＊本誌「パルティール」にも、「NEWS MG」ボランティアスタッフ担当コーナーを設ける予定です。どうぞお楽しみに。

BOOK ～私のおすすめの本～

中高生と語る［大脳生理学］の最前線
「進化しすぎた脳」

池谷裕二（著）朝日出版社

“人類最後のフロンティア”と呼ばれ、人の心を生み出す脳。この脳のことが少しずつわかってきました。脳の研究、特に記憶についての世界的エキスパートである著者が、アメリカの高校生への講義をまとめたわかりやすい一冊です。

「99.9%は仮説　思いこみで判断しないための考え方」

竹内薫（著）光文社新書

“科学は絶対的なものごとの基準ではありません。あくまでもひとつの見方に過ぎないのです。”著者はこう述べています。何かを絶対視することの危険性、多角的にものを見ることの大切さに気づかせてくれる一冊です。

おすすめいただいた先生

人間文化学科・心理学
大橋 智樹助教授

“心を科学する”学問が心理学です。2007年度開設予定の新学科にご期待ください。

MG Information

MG news 宮学ニュース

宮城学院120周年記念大学企画のイベントを紹介します

映画「ベアテの贈りもの」上映会を開催

オープン・キャンパスでにぎわう6月24日(土)、大学講堂では映画「ベアテの贈りもの」上映会が行われました。宮城学院創立120周年記念大学企画のひとつとして、10月に開催されるベアテ・シロタ・ゴードン講演会「日本の女性の役割―ベアテから次世代の女性たちへ―」のプレ企画です。

ベアテさんは終戦直後、GHQの民間要員として日本国憲法の草案作成に携わり、女性の基本的人権を憲法に盛り込むため力を尽くしました。22歳の若い彼女が情熱を傾けて作成した草案は憲法24条のもととなり、戦後の日本における女性の地位向上の礎となりました。

この事実は同じ年頃、同じ女性である本学の学生にとって、大きな刺激と励ましです。自分たちの手でベアテさんを迎えようと、学生と教員による実行委員会「みんなでベアテさんを迎える会」が結成され、まず、彼女についてより多くの人に知ってもらうために、ドキュメンタリー映画「ベアテの贈りもの」上映会を企画しました。午前、午後2回の上映で500人近い来場者がありました。次はいよいよ10月14日(土)午後の講演会。少女時代を日本で過ごしたベアテさんの講演は、もちろん日本語で行われます。

音楽科スタッフコンサート 開催

5月2日(火)、音楽科スタッフコンサート「Giardino della Musica(音楽の庭)Ⅳ」が仙台市青年文化センターで開催されました。宮城学院創立120周年を記念して音楽科の2つの庭である演奏実技の学びと、音楽文化・制作の学びをお聴きいただくプログラムで、第一部は大内典先生の講演「東北が育てた「音の庭」――羽黒山伏の音世界」でした。第二部は、ピアノ伴奏に本学名誉教授のW・S・カンディフ先生を迎えて、渡部ジュディス先生のオペラアリア、遠藤安彦先生伴奏による遠藤恭子先生のシューベルトのリート、そして、浅野繁先生と関本珠恵先生によるF・シュミットの「三つのラプソディー―2台4手のための―」と、多彩なプログラムを円熟の演奏でお楽しみいただきました。音楽科といえば、クラシック音楽の演奏学科とイメージされることも多いのですが、音の芸の広がりや音文化と仏教音楽や儀礼との関係など、音楽文化の奥深さと広さに関心を広げていただけたのではないでしょうか。

11月9日(木)開催の音楽科コンサートは、宮城学院創立120周年を記念して、オーケストラとのアンサンブル音楽をお届けします。モーツァルトのピアノコンチェルトとオペラ「フィガロの結婚」からのアリアと重唱というモーツァルトイヤーに相応しいプログラムによる学生の演奏をお聴きください。また、音楽科附属音楽教室も、仙台市青年文化センターシアターホールで10月22日(日)に120周年記念発表会を開催します。皆様のご来聴をお待ちしております。

サークル・学友会情報

大学祭実行委員会

私たちは大学祭の運営を支える活動をしています。1人でも多くの方に楽しんで頂けるような企画を考えるなど、大学祭を盛り上げるために日々頑張っています。今年の大学祭は「Anniversary」をテーマに10月21日(土)・22日(日)に行われます!!中夜祭には楽しい縁日を、後夜祭ではタレントを招聘したステージ企画を予定。記念すべき120周年の大学祭に、皆さん是非お越しください。

競技ダンス部

私たち競技ダンス部は東北大学と合同で総勢80名を超す大所帯です。競技ダンスには優雅なモダンと情熱的なラテンの部門があり、軽やかに見えても体力勝負のスポーツです。公式練習では、下級生に技術とダンスの楽しさを伝えられるよう毎回ミーティングを開きます。話し合いをしっかり行い各自の自主性ある活動を全体で支えることで、東北ブロックや全国大会でも好成績を残しています。

ウィンドオーケストラ部

私たちは、定期演奏会、東北工業大学とのジョイントコンサートをはじめ学内外でさまざまな行事を行っています。昨年度は光のページェント参加、部を代表してサックス4重奏でのアンサンブルコンテスト出場、またデイサービスセンターでのボランティア活動も行いさまざまな年齢層の方々に演奏を聴いていただくなど、活動の幅が広がっています。

campus calendar キャンパスカレンダー

9月18日(月)	創立記念日
9月30日(土)	創立120周年記念礼拝　礼拝堂増築献堂式
10月 7日(土)	オープンキャンパス in autumn
10月14日(土)	創立120周年記念特別講演／ベアテ・シロタ・ゴードン(大学講堂)
10月21日(土) 22日(日)	大学祭
10月28日(土)	創立120周年記念式典・記念講演会・祝賀会
11月 4日(土)	大学院入学試験日(第1回)
11月 9日(木)	創立120周年記念音楽科コンサート(仙台市青年文化センター)
11月11日(土)	編入学・TOEIC編入学試験日、公募制推薦入学選考日、指定校推薦入学選考日、MG推薦入学選考日、特別入試(社会人・帰国子女・新たな入学)試験日
11月16日(木)	学友会秋季総会
11月18日(土)	創立120周年記念演奏会(宮城県民会館)
11月25日(土)	創立120周年記念琉球大学八重山芸能(大学講堂)
12月 9日(土)	オープンキャンパス in winter
12月19日(火)	クリスマス礼拝
12月中旬	国際文化学科海外実習(フィリピン)
1月20日(土) 21日(日)	大学入試センター試験
2月 3日(土)	音楽科専門試験日(A日程入試)
2月 4日(日)	音楽科専門試験日 (A日程入試、大学入試センター試験利用入試)
2月 5日(月)	A日程入学試験日(全学科)
2月20日(火)～ 24日(土)	生活文化学科 学科展 (東北電力グリーンプラザ アクアホール)
2月24日(土)	大学院入学試験日(第2回)
3月 7日(水)	B日程入学試験日、特別入試(外国人留学生、帰国子女)試験日
3月中旬	音楽科卒業演奏会/論文・制作発表会
3月16日(金)	卒業礼拝、卒業パーティ
3月20日(火)	学位記授与式

時をこえて

先ごろ宮城学院創立120周年記念『パートフル童話集2006』が刊行された（出版／けやきの街）。ありがたいことに新聞各紙に取り上げられ、TBCラジオから作品のひとつが全国ネットで朗読されるなど、たいへん好評をいただいている。

表紙を飾っているのは東二番丁時代の第一校舎。レンガ造りの風格ある建物ながら、どこかなつかしくあたたかみのある絵である（絵／伊勢文夫・宮城学院事務局長）。

あるいはこの表紙に惹かれて『童話集』を手にされた方々も多いのではないだろうか。

宮城学院が東二番丁（現在仙台国際ホテルが建っている場所）を離れ、桜ケ丘に移転したのは1980年。それからすでに四半世紀が経過している。時の流れとともにあたりの風景もキャンパスを行き交う学生たちの姿も様変わりした。当時の面影を残すものは前号で紹介された噴水くらいなもの…ずっとそう思い込んでいた。だがある時、つかのまの静けさを求めて礼拝堂に足を踏み入れた私は、思いがけない場所に見覚えのあるレンガ造りの建物が描かれていることに気がついた。

礼拝堂に入ると大きなステンドグラスが東側の壁面を飾っている。むかって左から「マリアに抱かれた幼子イエス」（第1面）、「十字架にかけられたイエス」（第2面）、そして「昇天するイエス」（第3面）…。ところがよく見ると、その第1面に東二番丁時代の大講堂（兼礼拝堂）と噴水が、また第2面には開かれた聖書と鳩、すなわち宮城学院の校章がさりげなく組み込まれているではないか。そうだったのか…私はひとり頷いた。旧大講堂／礼拝堂に象徴される宮城学院の歴史と記憶は現在の礼拝堂に受け継がれ、今も静かに私たちを見守っていたのである。

今礼拝堂の拡張工事が行われている。増築部分はボランティア活動の拠点となる予定である。キャンパス中央に位置する礼拝堂は、これからも宮城学院に集う人々の心の拠り所として豊かな時を育み続けていくことだろう。

日本文学科　深澤　昌夫

編集後記

今、ここにある「宮城学院らしさ」

本誌を編集している大学広報委員会は昨年度から始まった新しい組織です。「宮城学院らしさ」をどう伝えるか。広報には多様な形がありますが、いつも考えるのはこのことです。たとえばポスターならば、基本情報を伝えると同時に、キャッチコピー、イメージ写真、文字の書体、配色などの具体的なデザインで「宮城学院らしさ」を表現したい。では「宮城学院らしさ」のエッセンスとは何か？ 歴史と伝統、女性のための学びの場、生きいきとした個の確立、背景にあるキリスト教精神…。あくまで個人の主観ですが、このようなキーワードが浮かびます。

本誌の記事からも、自ずと滲み出る「宮城学院らしさ」を感じとっていただければ幸いです。（N.O.）